

中論觀去來品について

里 見 泰 穩

龍樹の中論去來品の論理を追って見たい。去來品は二十五偈あるが、これを快憲の科文によって分科してみると次のようである。

三時門

破去法（第一偈—第六偈）

破去者（第七偈—第十一偈）

破初発（第十二偈—十四偈）

破住住者（第十五偈—第十七偈）

一異門

破去去者（第十八偈—第二十一偈）

因縁門

破去去者（第二十二偈—第二十三偈）

有無門(定不定門)

破去去者(第廿四偈—第廿五偈)

三時門に於ては、時を已去(*gata*)、未去(*agata*)、去時(*gamyamana*)の三部分に分けて、このうち已去には去(*gamana*)即ち去るといふ作用がなく、又未去にも去るといふ作用がない。已去はすでに過ぎ去った過去であり、未去は未だ去り始めない未来であるからそこには去るといふ作用、即ち去用はないといふのであらう。かくて、もし去用(*gamana*)があるとすれば、去りつつある現在である去時(*gamyamana*)に去用(*gamana*)があると考えられる。然し去時にも去(*gamana*)はないと立論するが龍樹の結論である。

去の作用は、一種の運動であるから、運動(*gesta*)のあるところに去るといふ作用があるのであり、従つて、已去、未去には去るといふ作用はないが、去時には去る作用があると一応、考えられる。それ故に去時に去用がある(*gamyamane gatis tatah*)と第二偈に述べられるが、此のことを否定するのが龍樹の目的である。第三偈から第六偈まではこの目的のために述べられる。ここで問題となつてゐるのは、「去時の去」といふ概念である。第三偈にも第四偈にも *gamyamānasya gamanam* (去時の去用)とあり、第五偈にも、格はロカティブであるが同じく *gamyamānasya gamane* (去時の去用に於つて)とあるように、此の概念が問題とされる。 *gamyamānasya gamana* という立言が成り立たないと論証しようといふのである。梵文では

gamyamānasya gamanam katham nāma-upapatsyate,

とある第三偈の前半は漢訳(羅什訳)では、

云何於「去時」而當「有去法」

とあるが、何れにしても同意であろう。梵文の如く「去時の去(用)は成立しない」と言っても、「去時に於て去法(去用)がどうしてあろうか、あり得ない」と漢訳のように立言しても、意味に変わりはない。「去時の去用」と言っても、「去時に於て去用がある」と言っても論理的には同意味である。龍樹は「去時の去用」と立言することはできないというのである。去用が現にそこにあるから去時と言い得るのであり、「去用」という概念を予想しなくては「去時」という概念を指定することはできないのであり、ここに「去時」という概念を成立させるために必要な「去用」の概念があり、更に、「去時の去用」というとき「去時」に於ける「去用」が必要になる。かくて、「去時の去用」という立言をするためには二つの去用が必要になる。かくて第五偈がこのことを次のように述べるのである。

gamyamānasya gamane

prasaktam gamane /

yena tad gamyamānaṃ ca

yaccaṭra gamanaṃ punaḥ //

若去時有去 則有二種去

一謂為去時 二謂去時去

ここでは「去時の去」もしくは「去時に去あり」という概念もしくは文が成立しないということが問題として取り上げられていて、この概念もしくは文が指示しているものが論ぜられているのではない。「去時の去」という立言ができないということ述べているのである。「去時」という概念を成立させるための「去(去用)」と「去時」

に於ける去(去用)と二つの「去用」を想定しなければ、「去時の去」という立言ができないが、二つの去用があれば二つの去者(*duau gantarau*)があることになる。かくて二つの去者があれば又四つの去用があることになり、四つの去用は四つの去者を要することになり、かくして無窮の過となるというのであろう。又「去用があることにより去時が成り立ち去時のなかに去用がある。」と解釈して「去用によって去時があり、去時によって去用がある」と解すれば循環論法となる。かくて「去時の去」という立言は成立しない。と結論されるのであるが、その「指示するもの」が此処では論じられてはいない。此のことは第十一偈(前偈と入れ代っている場合のあることが指適されている)によると一層明瞭である。この偈は前掲の科文によれば、破去者(第七偈から第十一偈まで)に含まれるところであるが、この第七偈から第十一偈で取扱われているのは、去者(*gantri*)と去法(*gamana*)を対称させて論じて行くのであるが、その論理は、第一偈から第六偈まで、即ち破去法のところで進められる論理と異ならない。第十一偈は次の如くである。

pakso gantā gacchati-iti

yasya tasya prasaṅgate.

gamanena vinā gantā

gantur gamanam icchatah.//

若謂去者去 是人則有咎

離去有去者 説去者有去

去者が去るといふ主張を抱く人には

去が無くして去者があるという過失が起るそれは去者に去があると許すのであるから。

— 宇井伯寿訳 東洋の論理 —

去者が去るといふ命題、それには去用を離れて去者ありといふことが結び付く。去者のもつ去用を要求するから。

— 羽溪了諦訳— 國訳一切経 —

If it is asserted that a passing entity comes to pass then a fallacy would result in that the entity could be separated from the coming to pass. (and yet) a passing entity requires the (condition of) passing away.

— By Kenneth K. Inada, The Hokuseido press —

梵文と二、三の訳文をあげたが、この偈で知られるように、命題 (pakso) が成立するかどうかが問題の中核である。ganta gacchati (去者が去す) という命題が成立しないことが主張せられるのである。ここでも命題そのものの論理性が問題となっていて、その指示するものについて論ぜられているのではない。

次に第十二偈から十四偈は破初発と科文されるところであるが、初発、即ち「去り始める」(gantun arabhayate) ということが、已去にも、未去にも、去時にもないと云って、去り始めることがないのだから去用がないと論ずるのである。この「去り始める」、即ち「初発」の思想は、カントの二律背反 (antinomie) に於ける「世界の始めがあるか、世界の始めはないか」という問題に通ずるものがある。世界の始めがあると主張することも、始めがないと主

張こするとも、同じ権利で成立するというのが二律背反であるが、これは、感性を缺いた理念の世界に於ける悟性使用によって起るといふのである。もし「去り始める」(gantum arabhate)といふことを究極的に推せば世界の始めといふことにならう。もしそう云うことができるるとすれば、この初発即ち「去り始める」といふ論理は理念の領域でなされていると云い得るだらう。勿論龍樹が中論で理念の領域でのみ立論しているといふことはできない。観因縁品に於ける第一偈をみれば、諸の存在、諸法の概念を、時間、空間のなかにあって何か質をもてるものとして規定しているのは、諸存在を現実の個物を志向していることを示している。

na svato nāpi parato

na dvabhyām nāpy ahetutaḥ /

utpannā jātu vidyante

Bhāvāḥ kvacana kecana //

諸法不自生 亦不從他生

不共無因 是故知無生

この偈の梵文には、何であつても (kecana) 何処にあつても (kvacana) 何時であつても (jātu) 諸の存在即ち諸法 (bhavāḥ) は……と言つて諸法は時間空間の制約され、何か質をもつものと規定されている。羅什訳では、この規定は無視されているが、中論全体の思想から見て此の制約は重要でないとの認識があつたのかも知れない。これらのことを考慮に入れておく必要があるが、「初発」の問題は理念の領域にあると思われる。

かくて、時を已去、未去、去時に分け、去時に去用を配し、或は去者と去用を対称してそれらが何れも成立しない

ことを結論する一種の運動否定論となっている。

二

運動否定論としては、古来、エレア学派のゼノンのパラドックスが有名である。エレア学派のアルメニデスが、「有があるのみであり、そして無はない。」として、ただ一つの静止したものがあただけで、多様性も変化もないと主張した。ヘーゲルは、これを「アルメニデスに於て初めて純粹思惟が確定せられた」として論理学の始めが哲学の本来の歴史の始めと同じであり、エレア哲学のなかに、絶對的なるものを有 (being) として把握したものとして評価している。勿論エレア学派の如く単に有を主張するだけに終始するものでないのがヘーゲルの立場であることは勿論であるが、純粹思惟の確立という点で評価しているのがヘーゲルである。ヘーゲルの言う如く、人間の思想史の上でこの有だけが考えられるとして思惟と存在との一致を確立したことはエレア学派の功であると言えるが、そのことから静止だけが主張されることは、常識に反することだし、パラドックスを形成する。ゼノンは、師アルメニデスの説を弁護するために有名なパラドックスを展開した。「アキレス亀を追う」とか「飛矢は静止している。」というパラドックスである。足の早いアキレスが亀を追う場合を考えてみる。アキレスが、後方の地点から、先発している亀を追うとする。アキレスが亀に追いつくには、現時点に亀のいる処まで行かなくてはならない。然しアキレスが最初亀がいた点に到達する時には亀は少しではあっても先へ進んでいるわけである。どこまで行っても、このくりかえしであって亀は、いつもアキレスより先に進んでいるわけであり、アキレスは亀に追いつけない、というのである。又飛んでいる矢は、瞬間を捉えてみれば一点に静止しているのであり、もしA点からB点まで動いたように見えてもそれは静止

と静止の連続であつて運動ではない。静止をいくら重ねても、やはり静止でしかないと云つて運動を否定するのである。このパラドックスが、パルズニデスの弁護に成功したとは言えないが、このパラドックスが二千年もの長い間、伝えられてきたのは、恐らく、このパラドックスが連続性の問題を含んでいたことによるであらう。その意味では、十九世紀に至つて、デデキント等により数学の世界で、無理数の導入が行われたことによって、このパラドックスの秘密は学問的に明らかになつたと云えるであらう。数直線の上に無限の点をとることができ、微分的にどこまでも極限に近づき得ることを予定することによつて運動否定が行われているのである。

この周知のパラドックスを述べてきたのは、去来品の運動否定の論理の運び方と対比して見たいからに外ならない。中論に於ても、此の箇處の青目註では、去時を半去半未去と規定することによつて、去時なしと説明しているが、これは去時を半ばは已去であり、半ばは未去であつて、去時という現在は過去と未来との交わる時点であり数直線上の一点が大いさのないものであるように、去時は大いさなく、ゼロに等しいものであり、無いのである。このように時を微分的に切つていくことにより、時間はないものと結論するのである。この去時を半去半未去と規定するには、やはり極限的な思考が底に動いていると言へる。

しかし中論の頌そのものは、右のような論証と異なる論理である。上に見てきた通り、頌が問題になるのは、「去時の去」(gamyanasya gamana)であり、「去者が去す」(ganta gacchati)という命題が成立しないという点から論理がすすめられたのである。

かく破去法、破去者、破初発と科文せられるところで、已去、未去、去時、去法、去者等が成立しないことを「去時の去用」という概念や「去者が去す」との命題が成立しないという弁証によって論じているのを見ると一種の運動否定論であるが、然しそれによって静止を主張しようとするのが龍樹の意企することではない。エレア学派のゼノンの論証は運動を否定することにより、静止を主張するのであるが、龍樹は静止も亦否定するのである。科文で破住住者と科せられる第十五偈第十六偈、第十七偈の三偈によって、住する (*visṭhāti*) と言うこともないと、暫らくとどまること、即ち静止もないと主張する。

ganta na tiśhāti tavad

agantā naiva tiśhāti.

anyo gantur agantuśca

kaś tritiyo 'tha tiśhāti//

去者則不住 不去者不住

離去不去者 何有第三住一 (羅什訳)

と第十五偈では、すべてのものを去者 (*ganta*) と不去者 (*aganta*) の二つに選言的に分けることにより第三者を排除して、去者は住せずまた不去者も住しない。去者と不去者以外は何もないのだから一切のものが住しないと主張したことになる。第十六偈、第十七偈は次の如く言っている。

ganta tavad tiśhāti-iti

katham eva-upapatsyate/

gamanena vinā gantā

yadā naiva-upapadyate://

去者若当住 云何有此義

若当離於去 去者不可得

na tīṣṭhāti gamyamānaṃ

na gatān na-agatān api./

gamaṇaṃ saṃpravṛtiśca

nivṛtiśca gataḥ sama://

去未去無住 去時亦無住

所有行止法 皆同於去義

第十五偈で「去者は住しない」と云い、不去者も住しないと云うが、去者も不去者も、何れも住者ではないのだから住するものではないというのであろう。不去者が住しないということについて更に弁証が必要な感を受けるがここでは、不去者についてそれ以上に論及してはいない。去者については第十六偈で、去用のない去者(gamanena vinā gantā)は成立しないのだから去者が住するということはないと論じているが不去者については論及するところがない。これについては観三相品などを援用すべきかもしれない。第十七偈では已去、未去、去時に住がないと立言している。そして最後にあらゆる行(sampravṛti)と止(nivṛti)の去用について論じたのと同じだと論じている。行—sampravṛti とは appearance, occurrence の意味であらう、止—nivṛti とは disappearance の意味

とすれば、行が現象とすれば、止はその単なる否定面であって何かを積極的に指示しているのではないととれる。これに、去者と不去者を当てて考えれば不去者はただ去者でないというだけで何かを指示するものでないと考えれば不去者も住しないと立言できるだろう。とにかく、このように住も否定するのが龍樹の立場である。運動も否定し、静止も否定して龍樹が主張したいのは一切空ということである。

これにつづく第十八偈—第二十一偈は、一異門と科文せられているが、概念の同一性 (*ekidhava*) と別異性 (*anabhava*) とを利用することにより、去者と去用を否定する。これにつづいて因縁門二偈、有無門 (定不定門) 二偈がつづくのである。